

二之丸庭園第9次発掘調査について(報告)

調査目的

調査区の規模は東西 10m、南北 16mである。調査目的は余芳東側の近世遺構状況の確認で、検出が予想される遺構は延段や飛石等の園路遺構である。調査区は余芳の東側に設定し、第3次(2015年度)発掘調査の余芳調査区東端に1mほど被るように設定した。

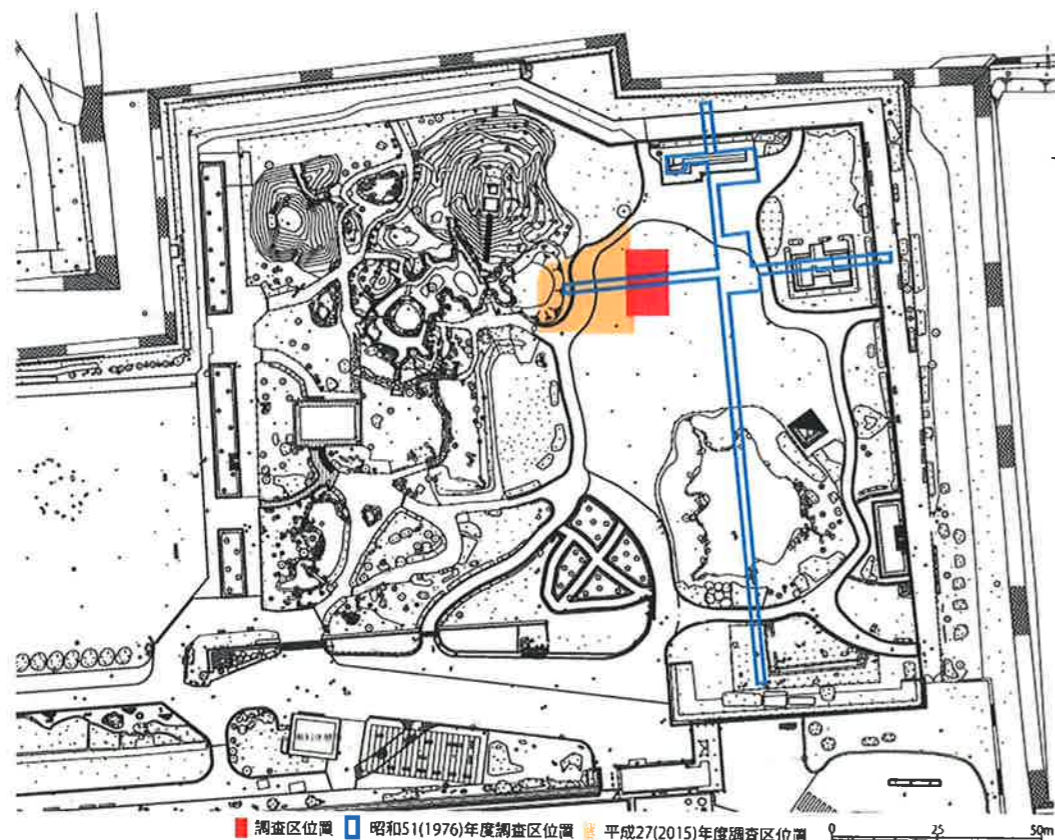


図1 2021年度 二之丸庭園第9次調査 調査区位置図

総括

今回の発掘調査では、検出が予想された園路遺構は確認できなかったが、絵図に書かれていない玉石と景石からなる遺構を確認することができた。遺物の状況から少なくとも近代まで存続していた遺構であると考えている。

調査区南側ではまとまった面を検出することができなかった。検出した道状遺構や瓦だまりは近代の遺構である可能性が高い。

玉石面や道状遺構などの直下に地山がある場合が多く、近世遺構面や地山を削ってこれらの遺構が施工されたと考えられる。すなわち文政期庭園はほとんど削平され残存していない可能性が高い。今後、大量の遺物が出土している5か所の瓦だまりの年代をさらに検討し、各瓦だまりに対する切合い関係から各遺構の年代を明らかにしていきたい。



図2 調査区全景(写真上が北)

基本層序

○調査区北半(図3)

表土—公園造成土—現代硬化面—近代遺物包含層—(黄色粘質土面)—玉石面
(黄色粘質土面は調査区北東で玉石面上面に乗っている。)

玉石面の下層は基本的に地山であるが、地山を掘りこむ瓦だまりを2箇所確認している。

○調査区南半

表土—公園造成土—現代硬化面—近代硬化面

近代硬化面の高さは一定ではないが、おおよそ調査区北半の玉石面より10~30cmほど高い。近代硬化面下は地山もしくは瓦だまりとなっている。



図3 北壁及び調査区北半(南から撮影)

検出遺構

○玉石面及び景石(図4)

玉石面は南北端を直径40~130cmの石で護岸されており、石が確認できない箇所は石抜き取り痕と思われる土が堆積している。東西端は抜き取り痕を含めて確認することができず、調査外に広がっていくと考えられる。

西側玉石面上面から幕末~近代にかけての遺物が出土した。遺物の様相から、西側玉石面は庭園廃絶後も露出していたと考えられる。一方で、東側玉石面は直上に黄色粘質土が約30cmの厚さで堆積している。黄色粘質土上面から出土した遺物の様相は西側玉石面とよく似ている。玉石面上に黄色粘質土が盛土され、黄色粘質土が地表に露出している時期があったと考えられる。

玉石面の下層は地山を整地した平坦面となっているが、一部で地山を切った瓦だまりとなっている箇所があった。瓦だまりはSD1北側の他に玉石面北側護岸の北にある攪乱(SX5)の壁面で確認されている。

瓦だまりから出土した遺物は丸瓦、平瓦、棧瓦、施釉瓦、三和土、延段片(図5)である。

玉石面は石によって護岸された範囲内に広がる。遺構の形状から、池もしくは川のようなものと考えられる。玉石面の下層は地山もしくは瓦だまりのため、保水機能を期待することはできないが、護岸の石材同士を漆喰で接続している箇所もあるため、安易に枯池と断定することは避けたい。

玉石面と景石からなる遺構は『御城御庭絵図』には描かれていないため、文政期の庭園遺構ではない可能性が高い。下層から棧瓦が大量に出土していること、玉石面に乗るように近代の遺物が出土していることから、『御城御庭絵図』成立後~兵舎建築時(1876年※)の間に造られた遺構であると考えられる。



図4 調査区北空中写真(写真上が北)



図5 SD1北側の瓦だまりから出土した延段片

※『歩兵第六連隊歴史』によると1874年に二之丸南側の兵舎を、1876年に二之丸北側(本調査区付近)の兵舎を建てることとなったとある。

○3次調査区における玉石面について(図6)

本調査で、玉石面を3次調査区東側の床面より20~30cm深い標高12.6~12.7m地点から検出した。玉石面は3次調査区東側まで延びることが予想されたためトレンチ4を3次調査区東側に設定して確認調査を行った。トレンチ4からも玉石面を検出することができ、さらに調査区外へ延びることがわかった。

3次調査では調査区東側の床面が約12.9mであり、玉石面は未検出であった。ただし、SD2北側を約12.65~12.75mまで下げており、航空写真から玉石らしきものを確認することができる。本調査区で玉石を検出した高さである12.7mまで掘り下げていれば玉石面を検出できた可能性がある。



図6 3次調査区オルソ画像+9次調査区空中写真
(写真上が北、赤枠が3次調査区、青枠が9次調査区)

○1976年調査区

1976年度調査では地山まで掘削しているため、床面が地山である。本調査で再掘削を行ったところ、一部の壁面と床面で地山を切る近世土が確認でき、近世の大型の土坑の存在(SK202、SK203)が確認できた。玉石面や玉石面と平面的に隣接する硬い盛土より下層から掘りこまれているため、平面プランは確認できず、規模の詳細は分からない。

東壁と南壁で瓦だまりを確認した(図7)。東壁瓦だまりの出土遺物は棧瓦や施釉瓦である。南壁瓦だまりは玉石面より高い位置から掘り込まれている。出土遺物は瓦のみで棧瓦が含ま

れる。南壁瓦だまり・層①・層②は後述する道状遺構を切っていることから、近代以降のものであると考えている。

○調査区南側(図8)

・道状遺構

硬い粘質の土で構成されている。直上で近代の葉灰と考えられる遺物が出たことから、近代の遺構と考えられる。幅1m強で南北に続く。南端は次第に不明瞭になり消滅し、北端は1976年調査区の手前で土坑に切られ消滅する。

・柱穴

調査区南側で十数個確認できるが、そのうちSP33~SP36の4つで内部に鋼土のような硬い土を確認した。SP33~SP36は南北約1.6m、東西約1mの長方形に結ぶことができる。SP33~SP36は同じ盛土を掘り込んでおり、溝1壁面の層序から盛土は地山を整地した上に施工されていると考えられる。

・瓦だまり

南北4m、東西4m以上である。陶器・瓦(棧瓦と施釉瓦を含む)が出た。瓦だまりはSP33~SP36のある盛土を掘り込んでいる。

新しい順に道状遺構、瓦だまり、SP33~SP36と周辺の盛土の順に並ぶと考えている。SP33~SP36と周辺の盛土は、瓦だまりを御殿解体に伴う廃棄土坑と考えると近世の地表面である可能性がある。

○トレンチ3(図8)

玉石面下の状況確認と調査区北側および南側遺構面の前後関係を確認するために設定した。

北端から中央にかけて巨大な瓦だまりを検出した。瓦だまりからは丸瓦や平瓦、棧瓦、施釉瓦など瓦のみ出土した。規模は南北5m、深さは約50cmである。

南側は大きくかく乱を受けている。かく乱は1976年調査区堀方よりも上面から掘り込まれているため、公園造成直前のものと考えられる。

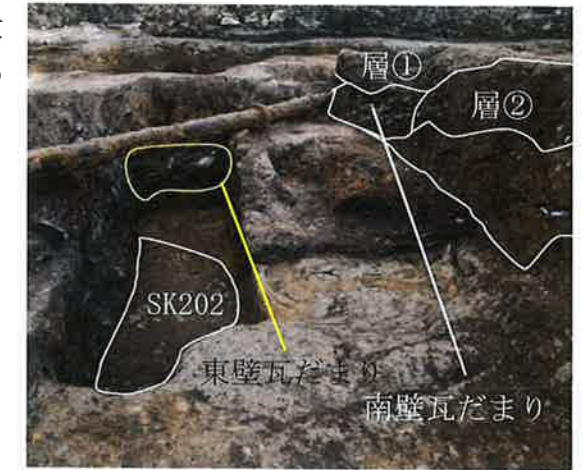


図7 1976年調査区(西から撮影)

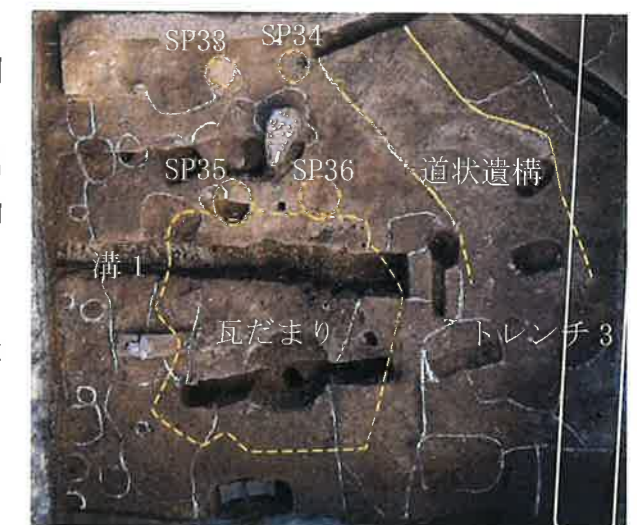


図8 調査区南空中写真(写真上が北)

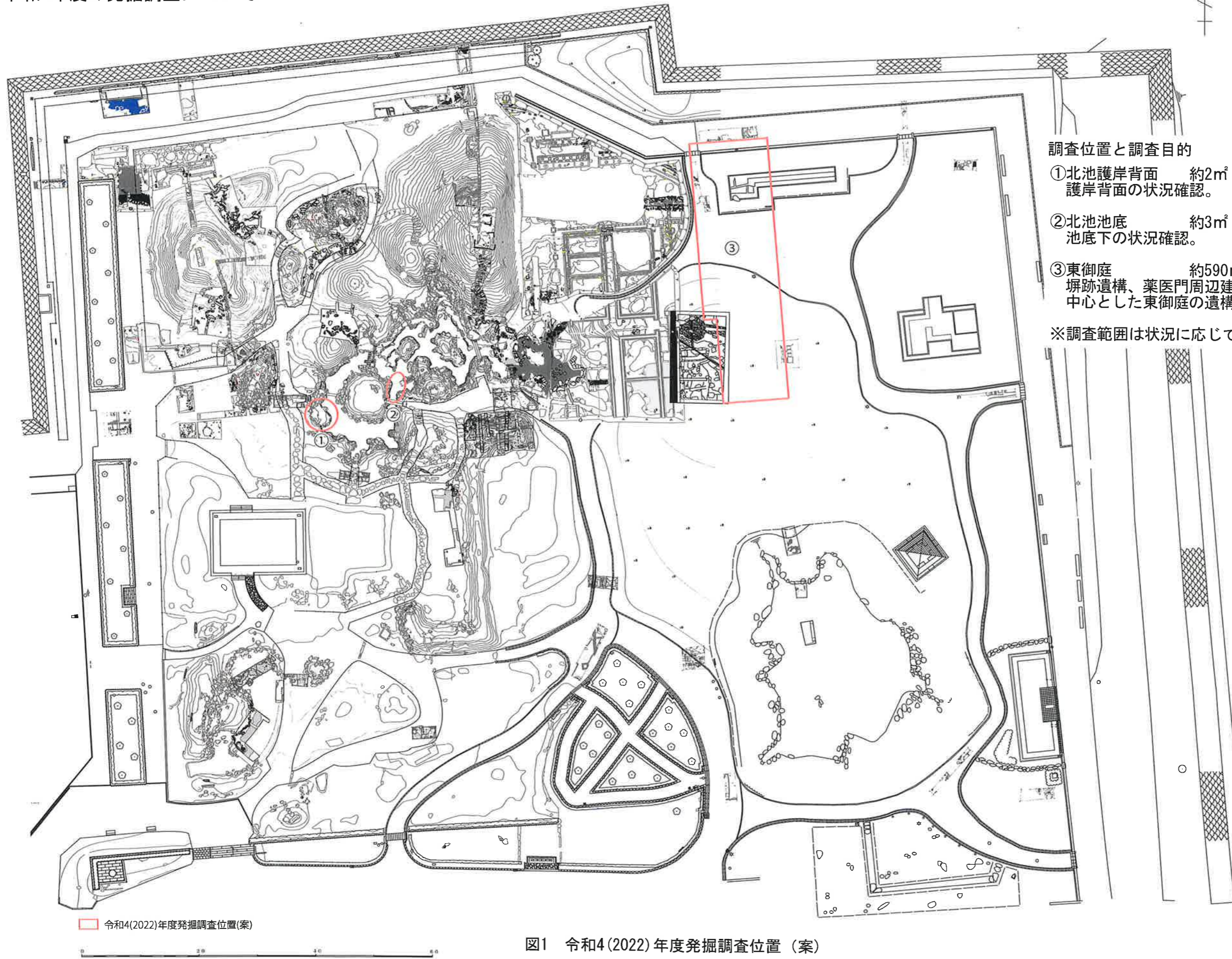


図1 令和4(2022)年度発掘調査位置(案)

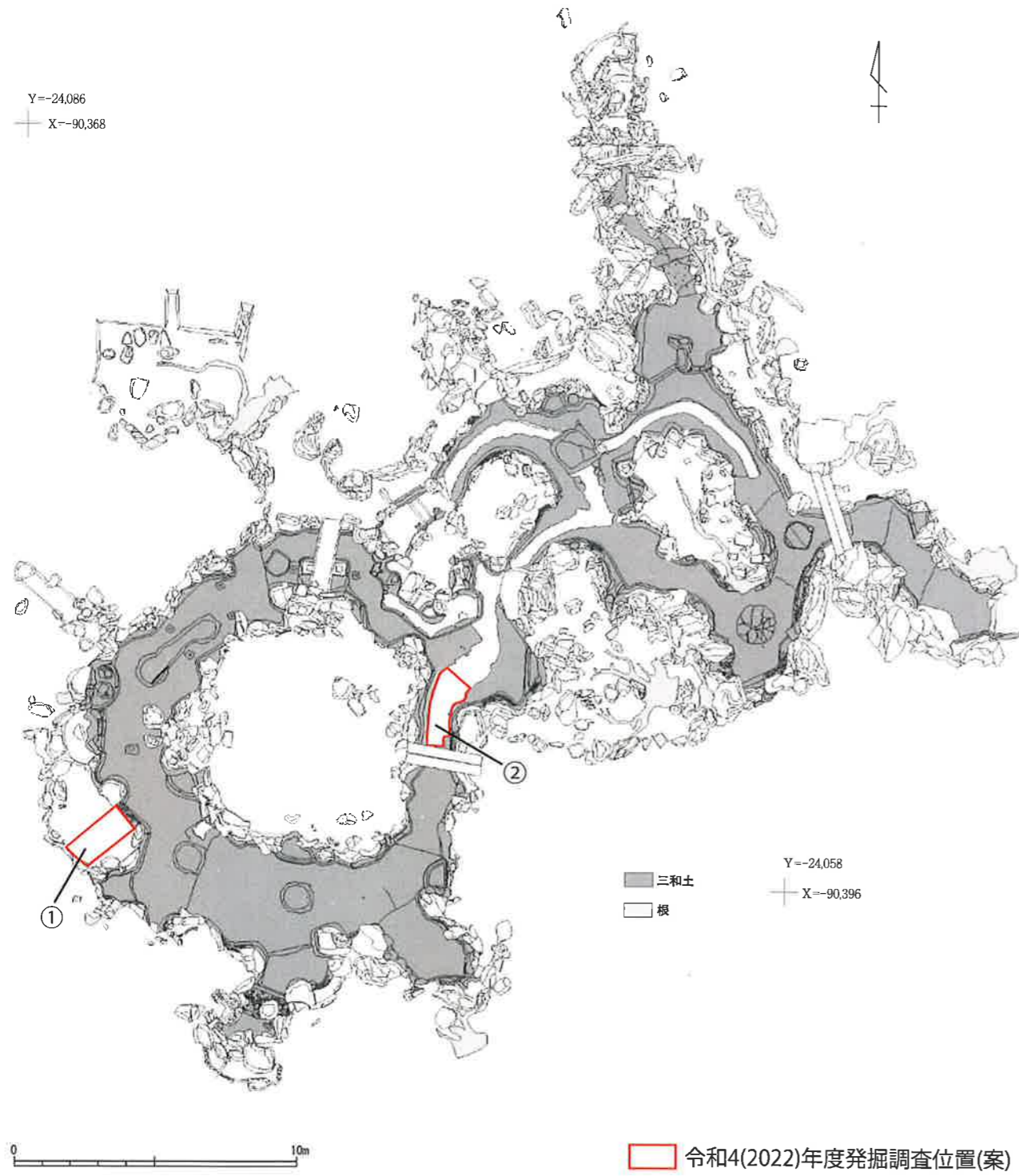
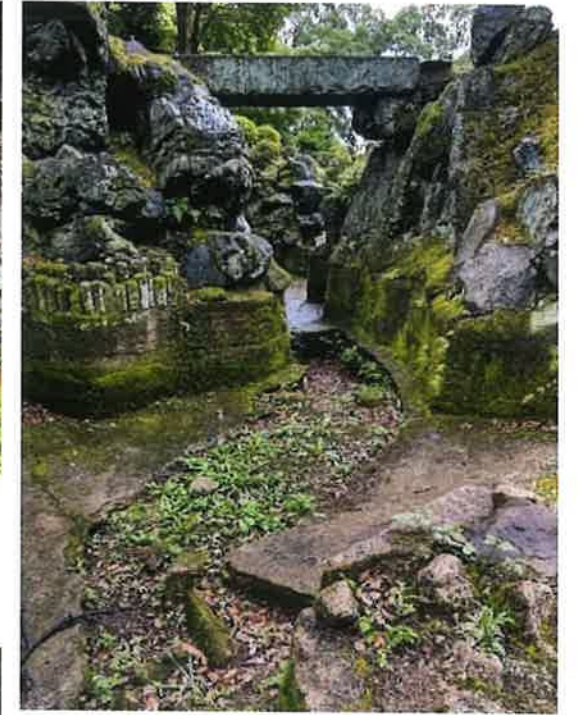


図2 北池遺構平面 (図1の①、②拡大)



①北池護岸背面(北西から)



②北池池底(北東から)



③東御庭北半(南東から)



③東御庭南半(南から)



- 塀礎石検出および推定位置
- 溝跡検出および推定位置



図3 過去の調査成果と今回の調査地点



①玉石及び景石(東から)



②礎石、溝及び玉石(南から)



③礎石及び溝(東から)



④礎石(西から)



⑤礎石及び溝(北西から)



⑥礎石、⑦三和土(多春園周辺)(南から)

過去の調査成果を踏まえた今回の調査目的

R3(2020)年度の第8次調査で、二之丸庭園の内部と外部を区画する塀の礎石と考えられる石と塀に伴うと思われる溝を検出した(②)。

塀の礎石と溝は過去の調査でも確認されており、R4(2022)年度の第10次調査で東御庭を調査することで、庭園の北側の区画が明らかになることが期待される。同じく第8次調査で、庭園外部の薬医門周辺建物の礎石を思われる石を検出した(④)。庭園を区画する塀跡と外部の建物跡の状況を確認することで、庭園北部の遺構と絵図との整合性を検討できるようになると考えている。

さらに、①と②で検出したそれぞれの玉石の広がりをはっきりさせることで、東御庭北部の遺構残存状況を適切に把握できると考えられる。